

翻  
訳

グスタフ・ルネ・ホッケ

ヨーロッパの日記

日記人間学 (一)

信 岡 資 生 記

1 偉大の分裂

内からと外からの二重の強制の重圧に喘ぐ自我。自我体験と歴史体験の毎日を通じて人間。自我が関わる対象が何であれ、またこの自我の収まる肉体が周囲世界から被る苦しみが何であれ、ヨーロッパの優れた日記におしなべて共通する一つのこと——それは人間的分裂という形をとった人間存在の意味を問うことである。その場合、これまでもうしばしば言及してきた一つの謎めいた状況が常に問題となる。即ち、突然人間の偉大さの魅惑が生じる。まるで或る種の人間が反射鏡に映る太陽に眼がくらんだ雲雀のように、あるいは、無か無に等しい存在の魔力にかかったかのように、魔の月世界のとりことなったかのように。シャルル・ボードレーールがかつ

ヨーロッパの日記 (一)

ヨーロッパの日記 (一)

て日記にこう記したのを思い起こす。「毎日を最も偉大な人間とならんことを！」<sup>(1)</sup>

およそ三百年以前に、イグナーティウス・フォン・ロヨラはその「宗教日記」の中に、自分は、父なる神が三位一体の**ペルヅナ**であるという三位一体の秘密がわかった、自分はどの**ペルヅナ**（父、子、精霊）にも喜びを覚えた、と書いた。彼は続ける。「この難題（あるいはとにかくそれに似たようなこと）が解けるといふのは大へん偉大なことのように思えて、私は（ほとんど）口を開いて我が身に向かい、『汝はいつたい誰だ？（どこから？）こうした事柄が云々』どこからきた？云々。本当に汝は何をした？あるいはどうしてこんなことが？云々』と言うのを止めることができなかった。」<sup>(2)</sup>イグナーティウスは自らを「**貶しめ**」「**卑しめ**」ようにする。「私の心の中に非常に大きな卑下の気持ちが生じ、天を仰ぐこともしなかった。私が空を見上げず、卑下し<sup>へつくだ</sup>遜ろうとつとめるにつれ、ますます苦味と神罰を味わった。」<sup>(3)</sup>

ボードレールは誇り高き偉大を、新たなロマンティックな、パガン・カトリック的ヒロイズムの幻想の中に追い求める。彼は「**人類の灯台**」<sup>(4)</sup>をあがめる。イグナーティウスは魂を滅私した神への帰依の中に謙虚な偉大を求める。ボードレールは悪魔<sup>サタン</sup>の巨人主義に、イグナーティウスは神の中に没した自我の神聖に魅了されている。

ロヨラにとってもボードレールにとっても、古代と中世の英雄伝説や聖者の伝記が模範となった。青年将校だったドン・イニゴ・フォン・ロヨラは専ら勇ましい騎士小説を愛読した。彼は一五二一年五月二十日負傷して以後、病院で読み物にヤコブ・フォン・ヴァラツォーの「聖人の華」（二九八）と、ルードルフ・フォン・ザクセンのイエス・キリストの伝記<sup>(5)</sup>（一三七七）を与えられた。彼の抱いていた偉大な英雄の理想はいわば顛覆する。輝かしい偉大な英雄騎士ロヨラは、自ら卑下した、つましく謙虚な、いわば滅私の「キリストの

兵士」に変身する。「憂愁」の詩人ボードレーも、子供の頃は「教皇」になりたかった、と日記に書いている。<sup>(6)</sup>だから日記の祈禱の一つに「英雄と聖者になる」ことを願っている。<sup>(7)</sup>別の箇所ではこう書いている。「自分、身のために、偉大な人間や聖者になること、これが唯一大事なことだ。」<sup>(8)</sup>死の数年前から彼は、物凄く本を書いて怒りを発散させ、「全人類を自分に対して激昂させたい」と思う。<sup>(9)</sup>サタンが彼の師となる。彼は「悪魔の連禱」を作る。「あらゆる天使の中で最も賢く美しい天使」が彼にとっては「冥府の王」となる。それをボードレーはあがめる。サタンの魔力が彼自身の抱く偉大さの理想となる。<sup>(10)</sup>

生の意味の探究は、日記の中では真の人間の偉大さとは何かという問いから出発することが非常に多い。ありとあらゆる理想の英雄や聖者物語が日記作者の空一面に星のように散らばっている。古代からの恒星が今なお燦然と輝いている——何らかの偉大の意味での真の、あるいは幻想の自己規定への道しるべとなって。プルターク（約四六—一二五）の著名なギリシア人とローマ人をペアにした伝記「対比列伝」は、中世の聖人伝、たとえばホノーリウス・フォン・オートン、クレーメンス・フォルトゥナートゥス、シトポリスのガリレア・チュリルスの人伝と同様、自己記述における人間学的偉大の序列の基準に影響を及ぼした。<sup>(11)</sup>また哲人の「伝記」——たとえばフィロストラート（前三世紀）のそれ——やソフィストたちの「伝記」——たとえばディオゲネス・ラエルティウス（三世紀）のそれ——も、後世において「英雄」物語の執筆を促し、人間学的観察や記述法に影響を及ぼした。ただしプルタークの最も感銘深い伝記は、ブルータス、デメートリアス、アントニウスといった不幸な英雄のものである。これら人物の悲劇的なパトスが、今日に至るまで無数の悲劇、戯曲、小説の人間学的背景を成している。「伝記」作者プルタークはホーマーと並んで何世紀もの間古代の最も有名な著述家となった。フランスのギ

ヨーロッパの日記 (一)

ムナージウムではプルタークは今日なお生徒たちに愛読されている。彼の性格描写に、老若を問わず「偉大」——完成した、偉大であれ挫折した、偉大であれ——の概念に眩惑された多くの人間の日記が文字通り燃え立ったものだ。

プルタークが特にルネサンス期の人文主義の中で、即ち個人主義の日記への第一歩を踏み出した時代に脚光を浴びたのは偶然ではない。既に十五世紀の初期グアリーノー・フォン・ヴェローナとその弟子たちは皇帝ハドリアーンのお気に入りプルタークの伝記をラテン語に訳した。フランスの人文主義者ジャック・アミヨ（一五一三—一五九三）はこれを優雅なフランス語に訳した。モンテニューはこの古代の伝記作家を「世界で最も判断の確かな著述家」と称えた。描かれた人物について彼は「私はこれらの人物の偉大さに浸された」<sup>(13)</sup>と書いている。エリザベス時代の演劇はシェークスピアの作品の上演ばかりでなく、これら英雄「伝記」の基本要素によって時代に政治的な影響さえも及ぼしたが、その後フランスの古典劇はプルタークの間像の中にヒューマンな緊張を求める。若いバイロン卿は日記にこう記入している。「私には野心はない。という意味は、あるとすればただ『皇帝か無』だ」<sup>(14)</sup>。ハローにおける学生時代の読書リストにはもうプルタークの名前が載っている。<sup>(15)</sup>

ジャン・ジャック・ルソー<sup>(16)</sup>も、「告白」の冒頭にプルタークを自分の「愛読書」<sup>(17)</sup>だとしている。ドイツの例を挙げれば、アウグスト・フォン・プラーテンは日記に「もしかすると他のいかなる歴史書にもまして早くからプルタークの伝記に惹かれたのかもしれない」と書いている。「キリスト教にとってこれに類する書物がないのをつも残念に思う」<sup>(18)</sup>。

その後の時代には全く異なった星々が英雄の空に出現する。トーマス・カーライル（一七八五—一八八二）にと

つてはオーディン、モハメット、ダンテ、シェイクスピア、ルター、ノックス、ジョンソン、ルソー、バーンズ、クロムウェルにナポレオン、つまり「何かを信じ、必ずしもすべてを否定したわけではなかった」人物たちである。<sup>(19)</sup> シャルル・ボードレールは詩「灯台」の中で、ルーベンス、レオナルド・ダ・ヴィンチ、レンブラント、ミケランジェロ、ヴァドー、ゴヤ、ドラクロワを挙げる。彼等は「世紀から世紀にわたって響き、永遠のふちに消えて行く激しい鳴咽を耳にした証人」なのだ。<sup>(20)</sup> ほぼ同時代（一八五〇年頃）ラルフ・ワールドウ・エマーソン（一八〇三—一八八二）は、「代表的人物」の中で、また変わった「現代的な」英雄のリストを示している。曰く、プラトンは「哲人」、スウェーデンボルグは「神秘主義者」、モンテーニュは「懷疑論者」、シェイクスピアは「世俗人」で負の記号のついた「民主的な」大衆世界の男、ゲーテは「作家」。<sup>(21)</sup>

「偉大」の崇拜はこうして君主、政治家、將軍、聖人から漸次哲人、神秘主義者、詩人、芸術家、作家の礼賛へと移り変わる。ここでも評価はしだいに批判の度を高めて行く。二十世紀に入ると文学の世界で「消極的英雄」が優勢を占める。今日の産業界の不当な秩序組織の中での個人崇拜の背理が亢進すると反比例して、「消極的英雄」はだんだん「負」の英雄と化して行く。人生の敗残者、夢想家、鬱病患者、乞食、精神病患者、売春婦、ありとあらゆる「規格外れ」。最後には「ごみバケツの詩」が生じる。顔のないコラージュ、つまりは薄汚れた、埃まみれの、ものの役に立たない、見下げ果てた、無用の、蚤の市向き安物の人格下の裏街道だ。ヨーロッパの「偉大」崇拜の豪華なシーザリズムとのこれにまさる対照は考えられまい。病める権力組織の誇大妄想狂的幻想の反動としてのこの低落は、こうした組織的となったダイズムの個々のエピソードがどう評価されるか知らないが、一つの現在精神の歴史的論理の現れと見なすことができる。ヨーロッパの罪はしばしば徳よりも

ヨーロッパの日記 (一)

得をする。もともと、今日の蚤の市英雄や裏街道のブリキの太鼓打ちヒーローは、純世俗化した自己貶下・世界貶下の、卑近な譬えで言えは一種の原子核分裂と言うべき俗悪合理主義的な偉大分裂のシンボルである。イグナ・ティウス・ロヨラの華麗なる偉大から謙虚なる偉大への転回は、未だ「神の掟」の中にあった。ごみバケツの英雄主義、糞尿主義となった偽実存哲学にあつては狡猾なマキユリーが代父であつた。廃物の「詩」にはつまり二重の論理がある。それが今日の時代の政治的ニヒリズムを映す能力を持つことは否定できない。しかし、対象のないグラン・ギニョールスタイルでの、この世界不安体験のコマーシャル化には楽天的な気分が漂っている。「黙示録」が工芸となると、それはグロテスクな親しみをもって人間的である。神様は終末を押しつけられはしない。もし神様が日記をつけられるとしても、このような記入にはただ「平和を！」と添え書きなされることであらう。

どうやら天地創造プランの中で偉大への憧れを課せられてしまったらしい人間を、不断の悲惨体験との関連でどう認識すべきか？ それ相應の人間の性格における矛盾をどう説明すべきか？ この疑問が自己自身と、また「邪悪な」周囲世界とひそかな対決をする日記作者を常に悩まし続けてきた。彼等もまた、生者と死者の間で交わされる創造的なヨーロッパ的心霊対話をたどりながら、遠い過去の性格学の「教父たち」の模範的言行の中に手がかりを求めようとした。こうして彼等は、もう一人の著名な人間学の古典的大家、さまざまに「道德的性格」の鋭敏な細密画入りの「倫理的人物」の著者、「性格学者」レスボスのテオフラスト（前三七二—二八七）に出会った。おべっか使い、猫つかぶり、おしゃべり等々——あやしい、人間類型のスケッチを十六世紀に初めてピルクハイマーが出版した。それは一五二七年、ニュルンベルクでのことで、これにはデューラーへの献辞が添

えてあった。このあとにイーザク・カゾボヌスの意欲的な注釈の付いたラテン語の翻訳が続いた（二五九二年）。カゾボヌスはわれわれにとって最初の主体的日記作者の一人である。十七世紀にラ・ブリュエール（一六四五一—一六九六）がこの訳書を更にフランス語に自由訳したが、彼は原典を敷衍し、たくさんの新しい性格タイプを描き加えて当時の批判的性格学とした。序文に彼は、「私は今世紀の人物・風俗を記す」<sup>(22)</sup>と書いている。やはりテオフラストが模範であるが、道徳心理学的ポートレートについてはモンテニュー、マルブランシュ、パスカル、ラ・ロシュフコーが新たな教師となる。<sup>(23)</sup>ルイ十四世時代の古典作品ラ・ブリュエールの人間の本性の類型は日記作者たちにとり、他人を描くにも、また他人との違いを際立たせて描く自画像にとっても常に基準となった。<sup>(24)</sup>彼等は偉大の輝きに欠点の影を付加することができた。ラ・ブリュエールの著作の主たる章は「人間について」であり、もう一つは「偉人について」となっている。人間だけでなく「偉人」までが分裂した存在として現れている。人間の本性の二重性から出発するこの観察法はすぐに一つの組織的方法となった。特にアミエルの日記にそれが見られる。ボードレールもしばしばラ・ブリュエールを引用する。<sup>(25)</sup>彼はラ・ブリュエールを「比類なき大家」と呼んでいる。<sup>(26)</sup>

アンドレ・ジッドは絶えずテオフラストないしはラ・ブリュエールの感化を受けた。彼はラ・ブリュエールを模倣しようとしてさえる。一九二二年十月十二日にジッドは日記にこう記入する。「私は『人さまさま』を新しく書き直したいという強い願望に捕らわれている。この企ては確かに僭越とは言えまい。私はこの本の構想を踏襲して同じように簡潔にわれわれの時代の姿を描いてみたい。今日の「誠実人間」が風俗と社会を成り立たせているさまざまな要素について、また文学と宗教と芸術について理性的に考えることのできるすべてを。」<sup>(27)</sup>一九二二

ヨーロッパの日記 (一)

年一月五日にはこう書いてある。「私は今朝ラ・ブリュエールが真の偉大と偽の偉大について書いた箇所を写した。<sup>(28)</sup>」チュニスに到着して二週間後の一九二六年九月二十六日に彼はこう記している。「私はラ・ブリュエールの『人さまざま』を読み直す。この池の水はあまりにも澄み切っているので、その深さを認識するためには長らくかみこんで見ていなければならない。<sup>(29)</sup>」

注

- (1) 真情の吐露 七〇ページ。ヴァイプリンガーは一八二二年六月二十日の日記に次のように記入している。「畜生！世界中をあつと驚かせるような人間にならねばならん。大地を火で焼き尽くしてやるぞ。もう一度本当の陶醉を味わうのだ。どえらい者になれなかったときなんて、糞いまいましい。」上掲書 一九七ページ（テキスト部参照）。フェルディナンド・グレゴロヴィウスは「ローマ日記」の一八五四年十月三日にこう書いている。「中世のローマの町の歴史を書こうと思う。この仕事のためには極めて高い天分が、例えばちょうどカピトリヌスのジュピター直きじきの委託のようなものが要ると思える……わが人生を充実させてくれるような何か偉大なことをやらねばならない。」ローマ日記 シュトゥットガルト 一八九二年、二〇ページ（テキスト部参照）。古典的な誇大妄想の発作にかかってマリー・バシユキルツェフは一八七七年八月七日の日記にこう記す。「とんでもないことだ！恐ろしい、身の毛のよだつ、身震いのすることばだ！死、おお、死……死……！ 自分のは何も遺さないで。犬みたいな死！死んだ後墓石に刻まれた名前の文字が判読つかなかったような女性が幾千万人となくいる！死……」日記 パリ 一九三五年、第一巻 三〇四ページ。キャサリン・マンスフィールドは日記にマリー・バシユキルツェフの文章を引用している。「結婚して子供を産んで、そして洗濯する女……私は名声が欲しい。」上掲書 三ページ（テキスト部参照）。表現主義の天才青年ゲオルク・ハイムはこれに反し——ヴィルヘルム二世の



時代に——「甲騎兵少尉」か……さもなくば「テロリスト」になりたいと願った。そして最後に彼は「自分は皇帝にならねばならなかったのに」と思う。上掲書 一六八ページ（テキスト部参照）。

(2) イグナーティウス・フォン・ロヨラ、宗教日記。一六八ページ。傍点は著者。

(3) 上掲書 一九四ページ。ロヨラは謙虚を三段階に分ける。一、万事において神の掟に従う卑下の謙虚。人はたとえ「この世におけるすべての被創造物の支配者に上」ろうとも、掟は常に人の上にある。二、名声や富よりもむしろ恥辱を希求する謙虚。三、貧しいキリストと共に清貧を、恥辱にまみれたキリストと共に恥辱を乞い願い、現世において賢く聡く思われるよりもむしろ無知愚直と思われようという気持ちを人間に起こさせる謙虚。「霊操」一六五節—一六七節参照。E・R・フォン・フレンツ S・J版より引用。フライブルク 一九五一年、九六ページ以下。

(4) 全集 一六八ページ。

(5) 霊操 ニページ。その後イグナーティウスはトーマス・フォン・ケンペン（一三七九—一四七一）の「キリストのまねびの四書」を読んだ。彼はそれらを「あらゆる信心書の中で最も貴重なもの」と呼んだ。聖書と並んで最も普及しているキリスト教の信心書であるこの「現代の祈り」の本は、デーヴェンター出身の贖罪説教師ゲルハルト・グローテ（一三四〇—一三八四）の宗教日記がもとになっているという。（ヘルダー版「キリストのまねび」のあとがき参照。フライブルク 一九五八年、二八〇ページ以下）

(6) 真情の吐露 七〇ページ。ボードレールはこの箇所でその理想像に彼の分裂した性格の他の一面を付け加えてはいらる。「——しかし武人の教皇だ——」

(7) 上掲書 五九ページ。

(8) 同書 六一ページ。傍点はボードレール。

ヨーロッパの日記 (一)

ヨーロッパの日記 (一)

- (9) 同書 XLIII ページ。テキスト部例文も参照。
- (10) 「サタンの連禱」 悪の華 E・レーノーによる完全版 パリ 一九五七年、二一九ページ以下参照。
- (11) 宗教的基準像についての詳細は第十章。
- (12) セネカとプルタークの弁護 随筆 八〇八ページ。
- (13) 同書 八〇九ページ。初のプルターク全集は、ドイツでは一七七四年から一七八二年の間に出版された。六巻本の「偉人伝」新版、新訳、K・ツィークラー解説・序文、チューリヒ・シュトゥットガルト 一九五四年より。コルネリウス・ネーボス（前九九―二四）の「名君皇帝伝」及び先に言及したスエトニウスの主著「皇帝伝」を思い起こして欲しい。プルタークは多数の「伝記」作者の励ましとなった。たとえばアタナージウス（聖アントニウス）、アインハルト（カール大帝）、ジョルジョ・ヴァザーリ、ジョバンニ・バリオーネから現代の自伝小説作家に至るまで。
- (14) 上掲書 二巻 二七二ページ。
- (15) 同書 一巻 一四一ページ。
- (16) 第一章 第II章参照。
- (17) 全集 第一巻 九ページ。クレチャン・ド・マルゼルブに宛ててルソーは一七六二年に、自分はプルタークを八歳で暗記したと書いた。同書 一二三八ページ。
- (18) 上掲書 第一巻 六四四ページ。
- (19) 「歴史上の英雄、英雄崇拜、英雄詩について」 ロンドン 一八四〇年 参照。
- (20) 悪の華 十七ページ以下。
- (21) 代表的人物七講話。全集 第四卷（百版） ロンドン 一九〇四年。

- (22) ジャン・デ・ラ・ブリュエール 人さまざま、あるいは今世紀の風俗。クロード・ロワの紹介のことば付き。パリ一九六〇年 六四ページ。
- (23) バスカルについては本章の次項で。
- (24) フランスのポートルート文学はシャルル・ソレル、ポール・スカロン、マドレーヌ・ド・スキュデリー、マドモアゼル・ド・モンパンシエ、マリ・ド・セヴィニエの作品の中で初の全盛期を迎えた。
- (25) たとえば就中「パリの憂鬱」。前掲書三一六ページの「パリのサロン」。ポートルートの章 八〇六、八三二ページ。
- (26) 美的好奇心 同書 九一六ページ。
- (27) 上掲書 七〇〇ページ。傍点は著者。
- (28) 同書 七二八ページ。傍点は著者。
- (29) 同書 八二六ページ。